

○^{はた} ^{きくこ} 秦 希久子, 稲山 貴代 (首都大学東京 大学院 人間健康科学研究科)

【背景・目的】在宅で生活する脊髄損傷者（以下、脊損者）の健康の維持や社会参加を支えるうえで、栄養・食生活支援は重要である。医療・福祉等の現場では、損傷部位による違いが重視される。しかし、栄養・食生活に関して損傷レベルに応じた支援が必要か、どこまで考慮すべきかは、これまで脊損者の栄養・食生活の研究が極めて少ないこともあり、不明である。本調査では脊損者の食生活を包括的に評価し、損傷部位との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】脊髄損傷者当事者が運営する社団法人全国脊髄損傷者連合会（以下、全脊連）に調査協力を依頼し、登録会員のうち脊損者 2,731名を調査対象とし、郵送による質問紙調査を実施した。調査票の枠組みは、QOL、健康状態、食物摂取状況、食行動、食行動の中間要因、準備要因、属性、食環境とした。返送のあった999名のうち解析可能な 918名

（男性781名、女性137名、有効回答率34%）について、性別、年齢区分別、損傷部位別に記述統計を行った。年齢区分は39歳以下、40～64歳、65歳以上の3区分、損傷部位は頸髄損傷、胸髄損傷、腰髄損傷の3区分にグループ分けをした。名義尺度は χ^2 検定、順序尺度は、性差はMann-WhitneyのU検定、損傷部位差と年齢区分差はKruskal-Wallisの検定、間隔尺度は、性差は対応のないt検定、損傷部位差と年齢区分差は一元配置分散分析後に事後の処理で多重比較をおこなった。統計解析ソフトはIBM SPSS Statistics 19（日本アイ・ビー・エム株式会社）を用い、有意水準は両側検定で5%未満とした。

【結果】平均年齢は男性 61.7 (SD 11.4) 歳、女性 57.6 (SD 13.1) 歳、受傷後経過年数は男性 28.0 (SD 13.2) 年、女性 27.9 (SD 15.9) 年であった。性差は、食関連QOLと日常の食物摂取状況で半分の項目、食行動、食知識、食環境ではほとんどの項目でみられた。年齢区分差はQOL、日常の食物摂取状況、食行動、結果期待を除く準備要因の項目でみられた。損傷部位差は、公的な介護サービスの有無と排便時間規則性、食行動の食事作り行動の項目でみられた。

【考察】性やライフステージによって食生活が異なることが国民健康・栄養調査をはじめ、先行研究によって示されているが、本研究においても同様に、男性よりは女性、若年者よりは高齢者の方が、食生活は良好であった。脊損者は生活習慣病のリスクがより高くなることが知られているが、障がいを負ったからといって、男性や若年者が特段に食生活が好ましいものになるわけではないことを示唆するものとする。一方、リハビリの場などで問題となる損傷部位による差はほとんどみられず、差がみられたものは、障がいによる身体機能が異なることが原因と予測される一部の項目にとどまった。在宅で生活できる脊損者への食生活支援は、損傷レベルに応じることが要求されるリハビリテーションとは異なる可能性が高い。これらの結果は、今後の具体的な支援策や介入企画を検討するうえでの基礎資料となると考える。

【結論】食生活においては、障がいによる機能特性を考慮しつつ、性やライフステージといった違いに目を向けた食生活支援が必要である。

E-mail ; hata-kikuko@hs.tmu.ac.jp